大磯町郷土資料館所蔵の脱穀・選別具について
～千歯扱、足踏脱穀機、動力脱穀機、万石～

＊ 佐川 和裕

＜はじめに＞

本稿は、大磯町郷土資料館で進めている収蔵資料目録化のうち、米麦の脱穀具および選別具４種についての集成である。当館では収蔵資料の目録化の一環として、これまでに『大磯町郷土資料館収蔵資料目録　絵はがきⅠ』（平成13年）、『大磯町郷土資料館収蔵資料目録　絵はがきⅡ』（平成14年）、『大磯町郷土資料館収蔵資料目録　民俗（生活）資料―衣―』（平成15年）、『大磯町郷土資料館収蔵資料目録　民俗（生活）資料―食―』（平成16年）、『大磯町郷土資料館収蔵資料目録　民俗（生活）資料―住―』（平成17年）の５冊を刊行した。また、『年報―平成９年度―』では「館所蔵民具目録―農具Ⅰ―」と題して、農耕に関わる民具のうち、鍬（ウナイグワ、サクリグワ、トグワ、マンガ）を実測図化しているほか、『年報―平成16年度―』では「大磯町郷土資料館所蔵の唐箕について」のなかで26点の唐箕を紹介した。なお、唐箕の集成にあたっての詳しい経緯は、既に同書において触れているため参照願いたい。唐箕は流通民具（千歯扱き・足踏脱穀機・動力脱穀機・唐箕・万石）をテーマとして調査を進めているパラサイツ（関東民具研究会）ならびに神奈川県立歴史博物館の共同研究に当館としても参加し、その一環としてまとめたものである。今回の脱穀具および選別具についても同様であり、したがって、本稿における当館収蔵資料情報は、共同研究において様式化された調査カードに基づいていることをお断りしておく。関東地域における多くの資料を集成した共同研究の成果については、報告書の刊行が待たれるところである。

＜調査収集の対象地域について＞

前号において詳しく触れているので、ここでは簡単に復しておく。当館は「湘南の丘陵と海」というテーマで活動を行っており、本稿で報告する脱穀具もまた同地域を対象として収集したものである。「湘南の丘陵」とは、いわゆる大磯丘陵のことであり、西の足柄平野と東の相模平野の狭間に位置する丘陵域を指している。丘陵域は平野部との環境に大きな違いがあり、同時にそれは生業内容を始めとする生活文化の特色となって現れている。比較的近距離にありながら東西の平野部との差異についてはさまざまな事象において顕在化しており、大磯丘陵は、酒匂平野・相模平野の双方の生活文化の重複位置にあることがうかがえる。また、内陸の神奈川県央部や県北部との差異も十分に意識しつつ、さらに東海道本線沿線であるという地理的な特性や条件も考慮する必要があろう。

（＊ 当館学芸員）

＜当館所蔵脱穀具と若干の分析について＞

①千歯扱

脚を差し込んだ木製の台木に櫛状の穂（歯）を固定したもので、稲や麦を穂の間に挟みこんで手前に引き、籾を扱き落とす道具である。[1] それまでの竹製のコキハシ（扱箸）や、台に打ちつけて脱粒させるなどの脱穀方法に比べて能率が格段に上がり、一度に千把もの稲を扱けるのでセンバコキと呼ばれたという。[2] ゴケダオシ（後家倒し）・ゴケゴロシ（後家殺し）などの別称も知られている。しかし、当地域では千歯扱以前の脱穀方法についての伝承は、残念ながら聞き取れていない。また、穂（歯）には、木製・竹製・鉄製があり、竹製のものが古いとされるが、当地域では竹製のものは確認できておらず、[3] 当館で所蔵している16点の千歯扱の穂は、いずれも鉄製である。所蔵資料の受入れ先の内訳は、大磯町内が13点、隣接する二宮町内が２点、平塚市内が１点である。基本的には受入れ先がそのまま使用地として判断して差し支えないが、平塚市内からの受入れ資料については使用地が特定されていない。これは、寄贈者本人の記憶により、古道具屋から譲り受けたものと伝えているためである。

さて、ここでは標準的な呼称として千歯扱と表記しているが、当地域では「マンガ」、もしくは一部で「センバ」と呼ばれている。なかでも大きな特徴は、いずれの場合もイネコキマンガ（センバ）やムギコキマンガ（センバ）といい、呼称の上では稲用と麦用を区別していることである。稲用と麦用の違いについては、台木に固定されている穂の間隔の広狭にあるという。すなわち、麦の方が稲よりもジク（軸・茎）が太いため、麦用の方が米用のマンガの穂の間隔よりも広いのだという。このような聞き取りからすれば、多くの家で稲用と麦用の２種類のマンガを所有していたと推測される。しかし、実際の受入れ状況からしてみると、必ずしも２種類のマンガを所有していたということでもなく、稲と麦の双方に共用していたのではないかということ、あるいは稲・麦のいずれかの使用頻度の多いことによる記憶や印象が呼称に反映されているのではないかと思わせる節もある。いずれにしても、寄贈者においてはマンガを実際に使用した経験を持つ人は少数であり、必ずしも十分な情報は得られていないのが現状である。

次いで、資料に記された文字情報をまとめておきたい。当館所蔵16点中、紀年が墨書されているのは年代順に次の７点である。

No. 7 ／ 文久３年（台部）、大正６年（穂部）
No. 9 ／ 明治34年・大正８年（台部）
No. 6 ／ 明治43年（台部）
No.16 ／ 明治45年（穂部）
No.12 ／ 大正４年（台部・穂部）
No. 2 ／ 大正５年（台部）
No. 8 ／ 大正５年（穂部）

当館において最も古いと思われるのはNo.7である。台部

に文久3年（1863）、穂部に大正6年（1917）の年号がみえる。台部の墨書には「文久三年亥十月吉日 渡邉氏求之」とあることから、同年に購入し、大正6年に穂部を補修したことがうかがえる。その後に続くのはNo.9で、台部に明治34年（1901）、穂部に大正8年（1919）の年号がみえる。

他の文字情報として、No.2、No.4、No.5、No.12には、「・相刄二宮　松本姓」もしくは「・相刄二宮　松本姓」とある。松本というのは所有者ではなく、農機具メーカーと思われる。相州二宮とは、大磯町の西隣にあたる二宮町のことである。これとは別に「相州二宮 大 製農具」と銘打ったものもあり、同町に複数の農機具メーカーがあったことがうかがわれる。なお、鍬の刃が減ったり、刃こぼれが生じると、二宮でサッカケ（サキカケ）をしてもらったという話も多く、農具に関しては二宮を通しての流通が盛んであったことが多くの聞き取りからうかがい知ることができる。

この他には、「大阪」（No.1）、「伯州」（No.10）、「紀州」（No.15）の文字が読める。千歯扱は特定の産地が知られている。代表的な産地として倉吉（鳥取県）のほか、木次（島根県）、尾道（広島県）、堺（大阪府）、早瀬（福井県）、羽茂（新潟県）、粉河（和歌山県）、上諏訪（長野県）があり[4]、産地からの行商によって全国各地に普及していった。このうち倉吉は代表的な産地で、「倉吉」あるいは「伯州」の墨書などと記され、流通量も多いといわれているが、その実際はパラサイツおよび神奈川県立歴史博物館の集計を待つほかない。また、No.10は、「・伯州出□」とあり、判読不能な文字が一字あるが、これは伯州の千歯鍛冶職人であった「田中富蔵」が八王子に定着して構えた「伯州出店」と推測される[5]（下線筆者）。

ところで、千歯扱にかかわりのある行事としてコキアゲについて記しておきたい。大磯町国府新宿では、麦の脱穀作業が一段落すると、コキアゲといって「変わりもの」を作って食べることがあった[6]。また、大磯町西小磯でも麦をこなし終わるとコキアゲとなった。地域全体の行事ではなく、各家の都合にあわせてお祝いをするもので、ソバを作って食べたという。ただし、コキアゲの日を設けずに、ノアガリと呼ばれる農休日に併せて行なうことも多かったようである。ノアガリでは農具を洗ってお神酒をあげ、餅を搗いてアンコロモチやアベカワモチを作ったり、小麦の饅頭を作って食べたという。夜にはソバかウドンを食べるのが一般的であった。また、稲の脱穀が終わるとカワリメシを作って食べたが、これをコキアゲと呼ぶ家もあった[7]。しかし、コキアゲという行事はもちろん、その言葉さえもかなり記憶から薄れてきているのが現状である。

②足踏脱穀機

足踏みによる力を胴部の回転する動力に変え、稲や麦の穂を扱いで籾に脱穀する機械である。労力の軽減と効率の良さから、それまでの千歯扱に変わって急速に普及した。当地域では、通常「脱穀機」で意味が通るが、その後に出た動力脱穀機と区別して、「足踏脱穀機」もしくは単に「アシブミ」と呼ぶ場合が多い。当地域での足踏脱穀機の普及は、大正時代から昭和時代初期にかけてといわれている。例えば、西小磯で明治35年（1902）に生まれた男性は、マンガを使っていた経験があり、使う時期になると、たいてい行商が修理に回って来たので、歯の間を締めてもらったという記憶を持っている。そして、話者がどうやら1人前になった頃に足踏みの機械が入ってきたという[8]。また、同所の大正8年（1919）生まれの男性は、子どもの頃にムギコキやイネコキを使ったが、その後まもなくアシブミに変わったという。大磯町国府新宿の明治38年（1905）生まれの男性は、昭和の初めまでマンガを使った。大磯町高麗の大正13年（1924）生まれの男性は、センバで脱穀していたのは知らないという[9]。なお、昭和9年（1934）7月に撮影された国府新宿における小麦の脱穀作業の写真では、足踏脱穀機にて作業をしている様子が写し出されている（写真1）。

（写真1）足踏脱穀機による脱穀作業

さて、足踏脱穀機の記されている文字情報であるが、基本的には農機具メーカーの名称が付されているものの、購入日や購入者（所有者）についての墨書はみられない。この点が情報内容において千歯扱と大きく異なっている。農機具メーカーの名称は以下のとおりである。

No. 1／共榮社第二工場（愛知県豊川市）
No. 2／細王舎第一工場（神奈川県川崎市）
No. 4／細王舎第一場（神奈川県橘樹郡生田村）
No. 5／株式会社日本農蠶機製作所
No. 6／木屋製作所（埼玉県川越市）
No. 7／細王舎第一場（神奈川県橘樹郡生田村）

総数は僅かであるが、その中で最も多いのは細王舎製であることが分かる。細王舎は製材業を営む箕輪政次郎により設立された工場で、大正10年（1921）頃に「ミノル式足踏脱穀機」を開発し、広範囲に流通した[10]。なお、No.4、7が「神奈川県橘樹郡生田村」の表記であるのに対して、No.2は「神奈川県川崎市」となっている。生田村が川崎市に編入されるのは昭和13年（1938）であることか

ら、製作時期あるいは購入時期の判断になる。No.1は愛知県豊川市の共榮社によるもの。愛知県は農機具メーカーの立地が集中している地域として知られており、先に報告した唐箕にも愛知県内の農機具メーカーが多数含まれている。当地域に多数が流入している要因には、東海道線による鉄道輸送の利便性も考えに入れる必要がありそうだ。No.5は日本農蠶機製作所によるものであるが、メーカーの所在は詳らかでない。No.7には「チヨダ」の商号が入っており、川越市の木屋製作所によるものであることが分かる。同製作所は、天保年間に織物器具や蚕具の製造・販売を手始めとして、明治末期に蚕具の改良とともに農機具の開発にも着手。明治44年に「木屋製作所」として創立し、川越市内で現在も操業している農機具メーカーである。[11]

また、文字情報のないNo.3を除いては、すべてに機種名が付されている。

No. 1／軽便稲麦扱機

No. 2／ミノル式親王号

No. 4／ミノル式親王号

No. 5／日の本式稲麦扱機

No. 6／人力脱穀機一号

No. 7／ミノル式親王号

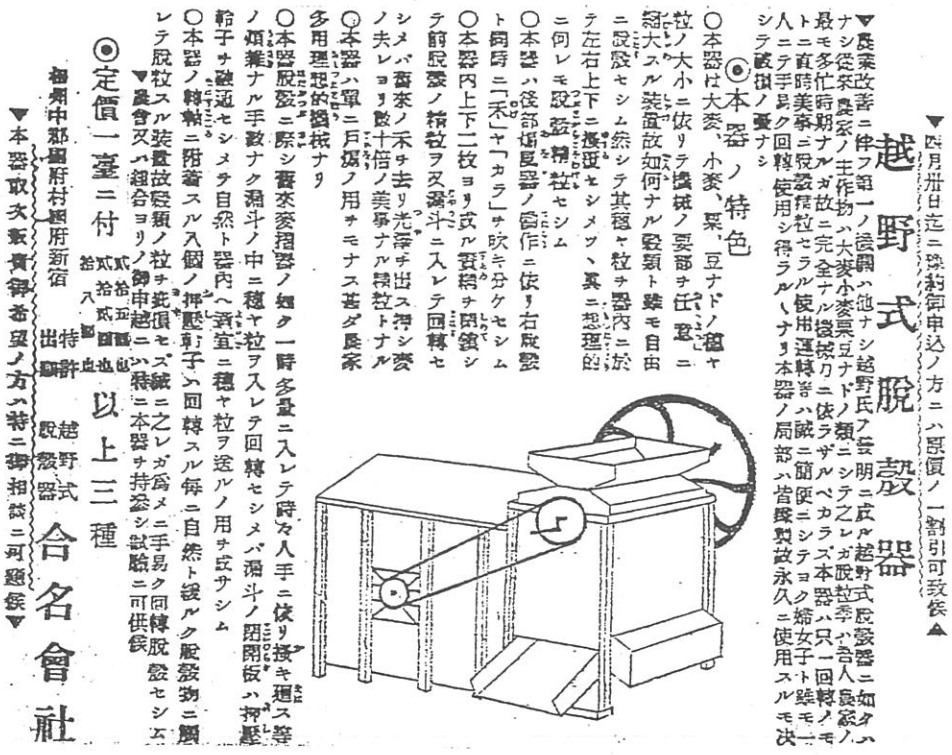
ところで、同じ人力による脱穀機であるものの、足踏とは動力源を異にする脱穀機について触れておきたい。

明治45年(1912)の横浜貿易新聞の広告によれば大磯町国府新宿に越野式脱穀機合名会社があったことが分かる（図1）。

同社では、新しく脱穀機を発明して専売特許を受け、町村農会や組合から注文が殺到しているという内容が掲載されている。木屋製作所が「人力用稲麦扱機」の試作機に成功した大正6年（1917）や、細王舎が「ミノル式足踏脱穀機」を開発した大正10年（1921）と比べると、かなり早い時期となる。しかし、広告の図から判断できる「越野式脱穀器」は、両メーカーの開発した脱穀機が足踏みによる動力であったのに対し、越野式は手回しによる動力であったようである。手回しによる脱穀機は、管見の限りではその存在についての情報はほとんど知らない。あるいは一般に普及しなかったのであろうか。今回の調査でも同社の脱穀機と判断されるものは確認できなかった。

③動力脱穀機

当地域では、動力脱穀機としてメーカーによる製品が普及する前に、足踏脱穀機に独自に動力をつけたという試みが聞かれる。大磯町高麗の大正13年（1924）生まれの男性は、兵役から帰還した昭和21年（1946）頃に、鍛冶屋にアシブミを改造してモーターをつけてもらった。これが動力脱穀機の最初だといい、その後しばらくして次第に普及するようになったという。一方で、大磯町大磯の大正5年（1916）生まれの男性が動力脱穀機を購入したのは昭和32～33年（1957～1958）頃であった。各家の生業環境や経済事情により、導入時期にはかなりの幅があったようである。[12]いずれにしても、足踏脱穀機では、麦の脱穀後にノギを落とすためにムギブチ（クルリブチ・クルリウチ）をしなければならなかったが、動力脱穀機導入後はムギブチをせずに済むようになったので、かなり楽になったとして歓迎されている。



（図1）越野式脱穀機の広告記事

当館が所蔵している動力脱穀機は現在 3 台である。これまで、他にも動力脱穀機の寄贈についての話はあったが、大型資料を収蔵するだけの余地がないため、以後は受入れをしていないのが現状である。所蔵 3 台のうち、文字情報は 2 台に付されている。足踏脱穀機と同様に、購入日や購入者（所有者）等の記銘はなく、農機具メーカーについての情報のみである。

No. 1／宮津農機株式会社（愛知県半田市）

また、機種名は次のとおりである。

No. 1／アサイ式動力脱穀機

No. 2／丸宮式脱穀機

ここでも愛知県内の農機具メーカーがみられる。

④万石

上部の漏斗部分から米粒を流れ落とし、シナスと呼ばれる生育の悪い粒や欠けた粒を選別し精粒する道具である。当地域では、通常「マンゴク」と呼ばれる。ただし、従来の万石に改良が加えられた比較的新しいものについては、ベイセンキ（米選機）と呼ばれることがある。特にベイセンキの場合は、流下する粒を選別する金網の部分が二重になっているものが多く、粒の均質化について精度をあげる改良がなされている。

さて、文字情報について、まず紀年銘は次のとおりである。なお、墨書はすべて本体の左右どちらかに書かれている

No. 6／明治 43 年 12 月 7 日買求

No.10／大正 3 年 12 月 1 日もとめ

No. 1／大正 5 年 11 月 1 日新調

No.12／大正 8 年 11 月求之

No. 5／大正 11 年 11 月吉祥日新調（11 月 15 日）

No. 3／昭和 7 年 10 月吉日

少ない資料数ではあるが、ほとんどが大正期に購入したことが分かる。No.6 については明治 43 年（1910）とわずかに時期を遡っており、当館収蔵資料の中では最古となっている。さらに同資料は、「中井村井之口 関泰次郎 熊澤粂吉 持主」の記銘があり、2 軒の共有であったことが注目される。また、No.3 にも「・・・共用具」の記銘がある。当地域でこれまでに確認できている 2 軒以上の共有物としては、祝儀や不祝儀に使う膳碗のほかに、稲荷講や念仏講などのいわゆる講中道具があるが[13]、農機具では動力籾摺機があるのみである。ただし、動力籾摺機の場合は、昭和 30 年（1955）頃に、高麗地区で共同購入して順番に使ったというものである。おそらく価格や使用頻度などを判断しての共同購入であると思われるが、個人で購入するようになったのは昭和 40 年代になってからだという。[14] 万石については 2 件のみの例であるが、万石の所有形態の一端を示すものと理解しておきたい。

ところで、かつて大磯町生沢に江戸期の年号をもった万石があった。過去形にしたのは、実は確固たる記録をとらないままに失われてしまったためである。まだ当館が建設される以前、たまたま訪問した家の物置内にあった万石が目に入った。驚いたことに、本体横には江戸の年号が墨書されていた。しかし、たいへん慌しい中での訪問であったため、あらためて伺うことにしてすぐにその場を辞したのである。その後なかなか都合が折り合わず訪問の機会をつかめずにいたところ、結局取り壊し廃棄されてしまったとのこと。その場では複数の職員が目にしたので江戸の年号は間違いないのだが、今となっては具体的な年号の記憶もはっきりしておらずどうしようもない。なぜその場でしっかりと確認し、あるいは寄贈もしくは寄託の措置をとらなかったのか、悔いるばかりである。しかし、少なくともかなり早い時期に万石を所有していた家があったことは間違いない。ただし、現在の所蔵資料を見る限りにおいては、大正期になって多くの家で購入することができたことや、同時期においても 2 軒で共有としていたことを考えれば、江戸期に所有していた家は、むしろ特異であったことが推測される。いわゆる生業環境や家格といったものと、どのようにかかわっているのか確認する必要があるだろう。

なお、先にも触れたが、いわゆる米選機については、ここでは万石と同じものとして集成したが、構造・機能上でかなりの改良が加えられており、単純に同一のものとして分類して良いものかどうか、一考すべき部分があるのではないかと考えている。

<おわりに>

以上、簡単ではあるが、当館が所蔵している脱穀具および選別具について概観し情報を整理した。少なくとも当館所蔵資料について基礎資料としての役割は果たすことはできるだろう。しかし、紙幅の制限もあり十分な考察はできなかった。千歯扱の穂の断面による年代の考証や補修の痕跡についても言及していない。足踏脱穀機について十分な情報の得られていない農機具メーカーもある。万石では、形態や構造、機能の面での分類に課題も残る。写真による紹介もできなかった。もとより資料数は少なく所蔵資料のみで傾向をよみとろうとすることには無理がある。パラサイツや神奈川県立歴史博物館の共同研究で進めている集計を待ちたい。

註

（1）日本民具学会編『日本民具辞典』1997 ぎょうせい

（2）小川直之、後藤廣史、佐藤広、増田昭子、関東民具研究会編『多摩民具事典』1997 （財）たましん地域文化財団

（3）同じ形状であるが、穂間が広く、藁を梳（す）く（すぐる）のに使うワラスグリには竹製の穂のものもみとめられる。

（4）前掲（1）

（5）小宮山登「田中富蔵の千歯扱―データからみた特徴―」『多摩のあゆみ』第 68 号 1992 （財）たましん地域文化財団

（6）『国府の民俗(三)―国府本郷・国府新宿・石神台地

区―』大磯町史民俗調査報告書三　1995　大磯町
(7)『大磯の民俗(一)―東小磯・西小磯地区―』大磯町史民俗調査報告書四　1997　大磯町
(8) 前掲 (7)
(9)『大磯の民俗(二)―大磯・東町・高麗地区―』大磯町史民俗調査報告書五　1998　大磯町
(10) 箕輪敏行「川崎でいちばん古い細王舎農機具工場」『多摩のあゆみ』第68号　1992　(財) たましん地域文化財団
(11) 榎本直樹「川越の農機具メーカー」『多摩のあゆみ』第68号　1992　(財) たましん地域文化財団
(12) 前掲 (9)
(13) 佐川和裕「ハレの食器と食事―神奈川県大磯町の事例―」『南関東の共有膳椀―ハレの食器をどうしていたか―』1999　関東民具研究会
(14) 前掲 (9)

追記

脱稿後、神奈川県立歴史博物館の総合研究「関東地方における民具の流通」の成果の一部として、同館より『神奈川県立歴史博物館総合研究報告 総合研究―関東地方における民具の流通』が刊行された。ここでは、「千歯扱き」「唐箕」「万石」「足踏み脱穀機」についてのデータの集積と研究報告がなされており、当館の収蔵資料を含めた関東地方における民具について、地域と物流の概観を知ることができる。なお、パラサイツ (関東民具研究会) においても独自に集計を進めており、報告書も近刊される見込みである。

＜千歯扱一覧＞

No.	(受入番号)	(資料名)	(使用地)	(備　考)
1	1983－0601	イネコキマンガ	大磯町国府本郷	＜台部＞専賣特許第三四五九号／□□本大阪□□農具店 ＜穂部＞□□□□農具商□□
2	1985－0102	イネコキマンガ	大磯町生沢	＜台部＞（飾り文字）／大正五年十一月三日　竹内金八／代金弐円五十銭／大正五年十二月国府村生沢　竹内　凡　／⌓　相劦二宮　松本姓／別製検査之印　　＜穂部＞竹内金八用具／國府村生澤西
3	1987－0401	ムギコキマンガ	＊平塚市菫平	＜台部＞ ⊐
4	1988－0101	ムギコキマンガ	大磯町国府新宿	＜台部＞⌓　（飾り文字）／新宿　加藤重右エ門様御□□／　⌓　相劦二宮　松本姓／保険附
5	1988－0101	ムギコキマンガ	大磯町国府新宿	＜台部＞　⌓　（飾り文字）／新宿　加藤重ヱ門様／⌓　相劦二宮　松本姓／保險附
6	1988－0303	ムギコキマンガ	大磯町高麗	＜台部＞（飾り文字）／マンガー　ムギコキ機　明治四十三年五月／明治四十三年五月購入
7	1989－0301	ムギコキセンバ	大磯町西小磯	＜台部＞ 今　（飾り文字）／文久三年亥十月吉日　渡邉氏求之　三丁口□□廿三　渡辺廣三□ ＜穂部＞渡辺廣三所有／大正六年／平□　今　保險
8	1991－0804	ムギ(イネ)コキマンガ	大磯町西小磯	＜穂部＞　⌓　（飾り文字）／大正五年／刃金請合⌓作
9	1992－0430	ムギ(イネ)コキマンガ	大磯町生沢	＜台部＞犬　（飾り文字）／中郡國府村生澤　大正八年六月壹日　竹内浦吉／明治三拾四□□□□□中郡國府村生沢　竹内浦吉／請合／冖倉□氷□
10	1996－1003	イネコキマンガ	大磯町西小磯	＜台部＞五丁口　稲扱小磯　椛ヤ□□廿五□□／今伯州出□／ヨ／☼
11	1996－1003	イネコキマンガ	大磯町西小磯	＜台部＞⌓　（飾り文字）／⌓　保険／西　九三　高橋要助様　三丁口／ヨ
12	1996－1003	イネコキマンガ	大磯町西小磯	＜台部＞ 舎　（飾り文字）／大正四年十一月　小磯　高橋要助　ヨ／大正四年　小磯　高橋要助／　⌓　相劦二宮　松本姓 ＜穂部＞／大正四年／吉作／別製
13	2001－0306	マンガ	大磯町国府新宿	＜台部＞（飾り文字）
14	2001－0306	マンガ	大磯町国府新宿	
15	2004－1203	イネコキマンガ	二宮町	＜台部＞／□キ　紀州□川　稲扱所
16	2004－1203	名称不明	二宮町	＜台部＞ 犬　（飾り文字）／二宮　小島常吉様／保険　相州二宮　犬　製　農具 ＜穂部＞明治四十五年／　犬□險／大□□無類

＜足踏脱穀機一覧＞

No.	(受入番号)	(資料名)	(使用地)	(備　考)
1	1983－0601	ダッコクキ	大磯町国府本郷	輕便稻麥扱機／TRADE MARK／豊年／ダイヤモンド／共榮社第二工場／愛知縣豊川
2	1983－0801	ダッコクキ	大磯町大磯	農林規格／一号／ミノル式親王號／□□商標 大王印／神奈川 川崎市／細王舎第一工場
3	1988－0101	ダッコクキ	大磯町国府新宿	
4	1989－0108	ダッコクキ	小田原市成田	於平和名誉銀牌受領／發明 元祖／特許機械製／新案特許／登録商標 大王印／ミノル式新王號／神奈川縣橘樹郡生田村／細王舎第一場製
5	1989－0310	ダッコクキ	大磯町西小磯	優秀（最新型）無比／實用新案登録／商標 日本／日の本式稻麥扱機／株式会會社日本農蠶機製作所
6	1990－0506	ダッコクキ	大磯町寺坂	チヨダ／農林規格 人力脱穀機／一號／埼玉縣木屋製作所 川越市
7	1997－0405	ダッコクキ(アシブミ)	大磯町大磯	於平和名誉銀牌受領／發明 元祖／特許機械製／新案特許／登録商標 大王印／ミノル式新王號／神奈川縣橘樹郡生田村／細王舎第一場製

＜動力脱穀機一覧＞

No.	(受入番号)	(資料名)	(使用地)	(備　考)
1	1983－0801	動力脱穀機	大磯町大磯	アサイ式／宮津農機株式會社製／アサイ式動力脱穀機 農林省通産省指定工場 愛知縣半田市 宮津農機株式會社／標準回轉数 米550～600回 小麥650～700回 大麥700～750回 主軸には高級無注油ベヤリングが使用してありますから注油を要しません
2	1984－1202	動力脱穀機	大磯町国府新宿	丸宮式 MARUMIYA／丸宮式脱穀機／丸宮式脱穀機 毎分回轉数 稲550～600 麥650～750 製品番号T-814494／丸宮式動力脱穀機 發明賞 登録商標
3	1991－0505	動力脱穀機	大磯町大磯	

＜万石一覧＞

No.	(受入番号)	(資料名)	(使用地)	(備　考)
1	1983－1202	マンゴク	大磯町国府本郷	中郡國府村本郷 近藤彌吾持／大正五年拾貳月一日新調
2	1984－0502	マンゴク	大磯町西小磯	柏屋式改良二重萬石／特製 ㊎
3	1985－0201	マンゴク	大磯町生沢	㊀ 原田式改良万石 ㊀ 共用具／㊀ 原田式改良万石 昭和七年十月吉日／商標 ㊀
4	1985－0201	マンゴク	大磯町生沢	富長式撰別機／富長式 特製／富長式 □号」
5	1991－1205	マンゴク	大磯町国府新宿	国府新宿 天 加藤氏／時ニ干大正拾年拾壱月吉祥日新調 十一月十五日／□□□□平井政
6	1994－0504	マンゴク	中井町井ノ口	中井村井之口 関泰次郎 熊澤粂吉 持主／神奈川縣足柄上郡中井村井ノ口下 明治四拾参年十二月七日買求 ／関泰次郎 熊澤粂吉 所有／明治四拾参年拾弐月七日新調／第八号／ 尒 二見
7	1994－0602	マンゴク	大磯町高麗	人力用 SASHINAMI 指浪式三重萬石
8	1994－0602	マンゴク	大磯町高麗	福◇米撰機 田原製作所
9	1995－0403	マンゴク	大磯町国府本郷	三徳万石／山陽線竜野駅前 三徳萬石会會社／名譽賞牌／最高名譽賞牌
10	1996－1003	マンゴク	大磯町西小磯	大正三年十二月一日 もとめ 大磯町西小磯 高橋要助 代金三円七拾銭／大正三年十二月一日 もとめ 高橋要助／請合 中郡田□原 木村
11	1997－0405	マンゴク	大磯大磯	＊漏斗のみ（本体なし）
12	2001－1006	マンゴク	大磯町国府新宿	大正八年十一月求之／ 千 定債金七圓也 ＊金網および漏斗欠損